

【九月の言葉（令和四年）】

往生ってなに？

この私が救われることです。

中世の人々にとって「往生」は、とても切実な問題でした。それは、中世の人々が「この世は短く、あの世は長い」と考えていたからです。「あの世」の生活が長く続くのですから、行き先が「浄土」か「地獄」かは大きな関心でした。それで中世の人々は、「浄土」へいくために様々な善根功徳を積むことになりました。多く積みせば浄土へ、少なければ地獄へいくことになります。しかし親鸞は、それでは浄土へいくか地獄へいくかを人間が決めることにならないかと疑問をもちました。それは阿彌陀さんをたのんでいるのではなく、人間の善根功徳をたのんでいる姿ではないかと。

親鸞が問題にしたいのは、「あの世」のことではなく、〈いま〉のことでした。往生とは、煩惱具足の私が〈いま〉救われる存在であることを阿彌陀如来に任せられるかどうかの問題なのです。阿彌陀如来にお任せして、往生という『心の拠り所』を私が〈いま〉得させていただけることが肝要なのです。

